

係夫とともに現生 *Quercus* 属花粉のSEMによる微細構造の検討を行なっている。今までに *Lepidobalanus* および *Cyclobalanopsis* では形態上の相違が明瞭であることがわかり、今後種レベルでの観察を行なう予定である。

八尾 昭 中・古生代の放散虫化石は、西南日本においてその多くが地角斜堆積層の中に見い出される。地角斜堆積層には一般的に化石が少なく、今までたよりにしていた石灰岩から産する化石は、その岩体の産状に問題が多いことから、あまりあてにしない方がよいということが明らかになってきた。そのため今まで見はなされていた放散虫化石なども地質学の分野から注目された。むしろ、注目する必要が生じてきた。一方、大洋底堆積物中の微化石の研究はめざましく発達し、放散虫化石に関しても新生代だけでなく白亜紀のものに及んでいる。しかし大洋底には確かなジュラ紀以前の堆積物は発見されておらず、中生代（ないし古生代）の放散虫の系統を明らかにすることは今後の重要な研究課題となっている。以上を研究の背景として具体的には西南日本各地の本州地角斜、四万十地角斜堆積層中から放散虫化石（主として中生代のもの）を抽出し、重要と思われるグループ（中生代に特徴的で、白亜紀のものとの系統がつきそうなグループ）に関して集中的なとりくみをおこなう予定である。また、この研究過程で、あるいはその結果から、それらがより詳細なオーダーでの地質年代決定に有効なもの（つまり示準化石）としてこの位置を獲得するであろうという予測も立てている。

吉田史郎 は三浦半島の三浦層群において浮遊性有孔虫化石による生層序学的研究をおこなっている。すでに試料採集、処理は完了しており、現在検鏡の段階である。処理標本の概観から、三浦層

群上部において *Miocene-Pliocene boundary* に関する新しいデータが出そうである。

例会報告

大阪微化石研究会第7回例会

- (1) 1974年2月2日(上)
- (2) 京都大学
- (3) 28名
- (4) 1. 第9回国際第四紀研究連合会議 (INQUA) に参加して-----
池辺展生 (大阪市大)
2. D.S.D.P Leg 3/ の成果----
小泉 格 (大阪大)
3. “コノドント” について-----
野上裕生 (京都大)
4. 機関紙 “NOM” の発刊について---

大阪微化石研究会第8回例会

- (1) 1974年4月6日(上)
- (2) 千里センタービル
- (3) 16名
- (4) 1. 掛川層群の浮遊性有孔虫について----
西村 昭 (京都大)
2. 奈良市付近の地獄谷累層について----
松岡敦充 (大阪市大)
3. 古生代デボン紀福地累層の古生物について-----
大野照文 (京都大)
4. 機関紙 “NOM” 第1号の発刊-----
小泉 格 (大阪大)

大阪微化石研究会第9回例会

- (1) 1974年6月8日(上)
- (2) 大阪市立自然史博物館
- (3) 19名

- (4) 1. 日本海と東北裏日本の新第三系について…
小泉 格 (大阪大)
2. KT 73号 試料中の微化石について…
原田憲一(京都大)・松岡教充(大阪市大)
3. 熊野層群 *Lepidocyclina* 産出地点の浮遊性有孔虫について…千地 石造(自然史館)

大阪微化石研究会第10回例会

- (1) 1974年8月/日(木)
- (2) 大阪市立自然史博物館
- (3) 10名
- (4) 1. 日本の上部新第三系の年代層序について
----- 池辺展生 (大阪市大)
2. "NOM" special Paper の出版 ----
原田憲一(京都大)・松岡教充(大阪市大)

大阪微化石研究会第11回例会

- (1) 1974年10月18日(金)
- (2) 京都大学
- (3) 24名
- (4) 1. "キール会議" に出席して ----
小泉 格(大阪大)・西田史朗(奈良教育大)・
原田憲一(京都大)
2. G.D.P. 第11次航海について ----
志岐常正・徳岡隆夫・西田潤一・
西村 昭・大野照文(京都大)・
紺田 功(奈良高)・松岡教充(大阪市大)
3. "NOM" 第2号の発行について ----

次回例会は12月/4日(土)午後2時より大阪教育大で行ないます。

1974年11月15日発行
編集発行大阪微化石研究会
560 豊中市待兼山町1-1
大阪大学教養部地学教室